



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

TIEPh



TOYO UNIVERSITY

Newsletter No. 06 2008. 7

欲望のコントロール

サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S)

東京大学地球持続戦略研究イニシアティブ (TIGS)

統括ディレクター・教授

住 明正



「檻褻は着てても心は錦」とは、水前寺清子の歌の一節ではあるが、貧乏人の心意気を表した言葉として心に残っている。この意味は、物質だけで人の価値は図れないということ

を主張しているが、一面では、やせ我慢といえなくもない。そう思って歴史を眺めてみると、繰り返し繰り返し「物欲に対し、心の貴さ」を主張する発言が多いことに気がつかされる。それほどに物欲の根は深いのであろう。

物欲の根柢には、生身の身体を持っているという人間の生物としての属性がある。言い換えれば、「我々は、血も涙もある」生物なのである。当然、腹が減れば何か食べたいのである。従って、このような凡俗の身にとっては、「高僧のごとき振る舞いはとてもとても」ということになる。この時に、「念仏一つで良い」と言った人は、なかなか人物だと感心する。「大事をなさなくてもちょっとしたことでいいんだよ」というのは重要な指摘である。

ただ、「衣食足りて礼節を知る」という言葉にあるように、生物的欲求を満足させればすむというわけでも無いのが、人間の難しさである。人間は、社会的な動物であるというように、社会の中での位置づけなどの欲望が持ち上がってくる。これは、生理的な欲求でないだけに管理が難しい。従って、宗教や倫理などの仕組みが必要になってきたのであろう。

現在の地球温暖化問題は、20 世紀型のパラダイムから 21 世紀型の新しいパラダイムを作り上げる試みとも言うことが出来る。ある意味では、自分の欲望の管理に関して、新しい見方、取り組みが必要になってくるのであろう。そうすると、「大変だ。そんな事は出来ない」と

というような声が上がってくる。しかし、何も大事と考える必要はない。

「大変じゃないことからボチボチとやってゆく」という態度が大変であると思う。ともすれば、事態をより複雑にして、結果として破局に向かうことが多いのであるが、その背景には、長時間の緊張に耐えきれない、我々の胆の弱さが存在するのである。「自ら欲するところを行えども矩を超えず」というように、いろいろな物事に対して、腹を据えて、何事にも動じない態度でゆく覚悟が必要であらう。



東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）は、自然観探究ユニット・価値意識調査ユニット・環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。今回のニューズレターでは、『「エコ・フィロソフィ」研究』第2号（2007年3月刊行）に掲載された論文を各ユニットの中から一編ずつ著者の先生ご自身に紹介していただきました。実際の本文やその他の論文につきましては、TIEPh ホームページ（<http://tieph.toyo.ac.jp/home.html>）をご参照ください。

第1ユニット “MOTTAINAI”から“SINOBINAI”へ

小路口 聡

— 中国哲学（儒教思想）からの提言 —

「もったいない」という日本語は、環境に対する取り組みで初めてノーベル平和賞を受賞したケニア人女性ワンガリ・マータイの力によって、一躍、国際語となり、「（自然環境の）大量破壊→大量生産→大量消費→大量廃棄」という、現代社会の悪循環の構造の見直しを迫り、循環型社会の構築を目指す、市民による、草の根運動の合い言葉となった。ところで、この「もったいない」という言葉は、そもそも、「捨てるに忍びない」という心情の表現である。その基底にあるのは、「見るに忍びない」、「殺すに忍びない」という場合の、「忍びない」という、人間の基本的な感情である。この「忍びない」という、人間の基本的な感情を、倫理の根源として捉えたのが、儒教の「仁」の思想である。

「仁」とは、「人」と「二」からなることから、二人（以上）の人間が、共に生きていくために欠かせない心、すなわち、「共生」の原理を言い表した概念である。それを、孟子は、「人に忍びない心」と言った。すなわち、「他者の苦しみに関心ではられない心」である。それは、また、「惻隠（共苦する）」、「恕（思いやる）」、「愛（他者を大切にすること）」、「信（信頼しあう）」という心でもある。

さらに、儒教徒たちは、この「仁」の心は人間の本性だ、と考えた。そして、この本性は、「天地が物を生ずる心」が人に宿ったものだ、とも考える。人は、この、天に由来する、自己の本性に突き動かされて、「仁」を行うのであれば、それは、自ずと、万物を生み出してやまない、天地の心にも適った行為となる。すなわち、仁の実践は、内発的で、「自然（自ずから然る）」ものなのである。自然であればこそ、それは持続可能な道となる。このように、持続可能性ということについても、共生ということについても、それを支えていくための原理と考えられたのが、すなわち、「仁」であった。

「もったいない」が循環型社会のための合い言葉であるとしたら、「忍びない」は共生社会のための合い言葉であると言える。天地万物を一体とみなす「仁」の端緒にして、倫理の根源である、「忍びない」という心の重要性を再認識し、その上に立って、利己主義・功利主義的な近代的世界観の中であって、それを越える「共生」の原理に基づく「仁」の哲学を再構築し、それに従って生きていくことを提案したい。

第2ユニット 環境配慮行動を促すための社会心理学的アプローチ

今井 芳昭

Social psychological approaches to produce ecological behavior

本研究の目的は、より多くの人々に環境配慮的な行動を促すための方法を社会心理学の立場から検討することである。

まず、考察の対象となる環境配慮行動を国際、国家、地域、企業、家庭、個人の6レベルに分け、本研究において焦点を当てるのは、家庭、個人レベルの環境配慮行動である。

次に、Ajzen(1991)の計画的行動理論(Theory of Planned Behavior)に注目する。その理論によれば、個人が意図的に環境配慮行動を取るためには、(a)環境配慮行動に対する態度（ポジティブもしくはネガティブな評価）、(b)環境配慮行動

を取ることに對する主観的規範（行為者が環境配慮行動を取ることを周囲にいる重要他者が期待していること）、そして、(c)環境配慮行動の実施に対する行為者のコントロール感を高めることが重要である。特に、環境配慮行動に対する態度を望ましい方向に導くためには、説得メッセージの送り手が主張点と反論の双方を提示する（両面提示）こと、主張点とそのメリットを先に提示すること、環境配慮行動に対する受け手の自我関与度を高め、よく考え（精査）させることが有効である。

さらに、Cialdini(2001)の指摘した6つの社会的影響の原理のうち、コミットメント(commitment)と社会的証明(social proof)に注目する。コミットメントとは、あることに関わりをもつことであり、あることを行うと宣言する、あることを実際に始める、署名するなどが含まれる。われわれは、自分の行動が首尾一貫していることや言行一致に価値をおいているので、自分の言動に合致するような形でその後の行動が規定されやすくなる。したがって、具体的には、実際に環境配慮行動を取っているところをイメージさせたり、他者に環境配慮行動を取るよう説得するための論拠を考えさせたり、説得納得ゲーム（杉浦, 2005）に参加させたりすることが1つの方法である。

また、社会的証明とは、多くの他者の行動パターンが社会的な正しさを形成することである。われわれは、周囲にいる他者の行動パターンの影響を受けやすく、他者の行動パターンが社会的な規範を作ることになる。そのため、環境配慮行動を促進させていくためには、多くの人が環境配慮行動を既に始めていることを提示し、そうした状況と受け手の行動とのズレを認識させていくことも必要である。

以上の議論を踏まえれば、環境配慮行動に対してポジティブな評価をするような情報を人々に提供し、環境配慮行動に少しでもコミットさせ、多くの人が環境配慮行動を行っていることを提示して、望ましい循環を作っていくことであると言える。

第3ユニット

環境概念の前史

稲垣 諭

— 環境内存在の現象学的アプローチへ向けて (1) —

「環境」という語は、当初より生物が「その中」にいないということが考えられないようなものとして設定されている。さらには「その中」と述べる際の、「その」という閉域が何であるのかを問い始めると終わりが見えないものとして設定されてもいる。にもかかわらず、地球環境や自然環境、生態環境、社会環境、体内環境というように多くの環境が存在していると誰もが思っている。環境は、物質的なものおよび、その移動ないし変化と密接に関係しつつも、物質的なものに完全には還元することができない何ものである。この還元不可能性が、環境概念を豊かにすると同時に、曖昧なものにしている。そもそも環境一般について語ることは何について語る 것인가。環境一般論を論ずるのが困難な理由のひとつは、環境という概念が「何にとって」の環境なのかという問いと切り離すことができないことにある。この何にとっての「何」が、たとえば地球や生態系、社会、人間、身体、貧困者、高齢者、身体障害者などに切り替わることで、環境概念の射程は收拾がつかないほど大きく変化してしまう。現在叫ばれている環境問題においても、何をすれば環境へとアクセスするのが決まらない状況が多々出現しているが、これも上記の環境概念の固有性に含まれているものである。

私たちは、環境という概念で何を理解しているのか。もしくは何を理解すべきなのか。問いは切迫的になればなるほど、その問いからの距離が取りにくくなる。そこで本研究では、環境概念の前史を概観しつつ、上記の問いに見通しを与えるための足掛かりを作る。そのことが、今後ますます切迫するであろう環境にかかわる問題から、ある種の距離をとることを可能にするとも思われる。そのさい「環境」が「何であるのか」を特定する議論にとどまらず、「環境とともに私たちはどのように行為し、その中で私たちは何になりうるのか」という可能性へ届かせる議論を行いたいと考えている。

手がかりにするのは、ニュートン、コント、ベルナル、マッハといった17世紀から20世紀へかけての科学者の思想である。彼らは動機は異なるにしても、それぞれが固有な現象領域を独自に切り開いてきたものたちである。彼らの思索の吟味により、「流体的な媒質としての環境」、「有機体と不可分な環境」、「生命に浸透する環境」、「行為に相即する環境」といった異なるモードの環境概念が取り出されることになる。それぞれの環境のモードに応じて探求の手続きの仕方も、デザイン構想の仕方も変化してくる。環境モードのさらなる細分化とそれらに相応する環境デザインの現実的な構想が、次の課題として現れてくる。

TIEPh 事務局から

<研究助手：新任挨拶>

2007 年 5 月に東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブの研究助手に就任した田中綾乃と申します。私は、18 世紀のドイツの哲学者イマヌエル・カントの哲学研究を中心に、生命倫理やテクノロジーと自然との関係といった現代哲学の諸問題に関心を抱いて研究を行っています。目まぐるしく変化する現代社会において、今後は「エコ・フィロソフィ」という観点から哲学の可能性や役割を探究したいと考えています。



<TIEPh 活動報告>

4 月～7 月

「全学総合」講義として、「エコ・フィロソフィ入門」を開講

5 月 8 日

TIEPh 2008 年度セミナー<1>

「資源利用の人類学」 講師：長谷川眞理子

5 月 23 日～24 日

第 55 回 日本病跡学会総会

「創造性と経験の変容」

主催：日本病跡学会

共催：TIEPh

7 月 5 日～6 日

第 9 回 日本認知運動療法研究会学術集会

「心の可塑性—ロマンティックサイエンスの世界—」

主催：日本認知運動療法研究会

共催：TIEPh

9 月 24 日

TIEPh ワークショップ テーマ: “Umwelt”(環境)を巡って

11 月 8 日

茨城大学 (ICAS)・東洋大学 (TIEPh) 共催 国際セミナー

「持続可能な発展と自然・人間—西洋と東洋の対話から新しいエコ・フィロソフィを求めて」

11 月 22 日

国際シンポジウム

「環境保護のコミュニティ活動をめぐって」(仮題)

主催：TIEPh

11 月下旬～12 月上旬

第 2 ユニット：サステナビリティに関する価値についての意識調査 於：ベトナム

12 月

TIEPh 2008 年度セミナー<2>

「サステナビリティ学における哲学の役割」(仮題)

2 月

TIEPh ワークショップ

3 月

第 3 ユニット：ヨーロッパの「環境哲学」についての調査 於：フランス

今後の活動予定と活動報告の詳細は、随時 HP (<http://tieph.toyo.ac.jp/>) でアップします

<TIEPh 活動予定>

8 月

第 3 ユニット：ヨーロッパの「環境哲学」についての調査

於：ドイツ、イタリア

ニュースレター第 6 号

平成 20 年 7 月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所：東京都文京区白山 5 丁目 28-20 6 号館 4F 60458 室

TEL: 03-3945-7534

Email: ml.tieph-office@ml.toyonet.toyo.ac.jp

Homepage: <http://tieph.toyo.ac.jp/>